平成２６年度第１回岡山市がん対策推進委員会概要

日時：平成２６年８月２５日（月）
午後１時３０分～３時
場所：岡山市保健福祉会館９階
機能回復訓練室

１　開会　　松岡保健福祉局審議監あいさつ

２　報告

（１）がん対策推進委員会記録　　資料１事務局説明

（２）がん検診のまとめ　　資料２事務局説明

○委員：受診者数が下がっている理由は何か。その対策はとっているのか。

○事務局：はっきりとした理由はわからないが、乳・子宮・大腸がんはクーポンを配ったり、愛育委員さんにＰＲをしていただいたり、広報紙やチラシで宣伝したりといろいろ策は講じているのだが、なかなか受診者数が上がらない。

○事務局：従来から受診率アップに向けていろいろ対策を行っているが、結果的に上がっていない。検診の種類によっても受診状況が変わってくるので、今回は肺がんについて取り上げていただこうと思っている。原因がわからないからこそ、相談させていただきたい。

○委員：精度管理だが、集団検診には全国の比較がないが、医療機関の比較に少し問題があるということ。許容値より下がっているところはどうなのか。医療機関自身の精度管理はどうやっているのかと思うのだが。

○事務局：この結果は、毎年年度初めに行う検診説明会でも出させていただいている。精密検査をきちんと受けていただくよう勧奨してもらうことや、精密検査を受けた場合はきちんと市に報告をしてもらうようお願いをしている。

○委員：精密検査も自分の所でやるとなったら、少しハードルが低くなるかなという気もする。変な話だが、怪しいものは基本的に精密検査に回すということで、医療機関の方が要精検率が高いのではないか。集団検診とのこの差はそれで説明が一つつくのかなと思う。岡山県の統計だがこれは岡山市も含むのか。

○事務局：岡山市も含んでいる。

○委員：岡山市は人口７０万、岡山県が２００万弱なので、岡山市の動向が岡山県全体に影響するはず。岡山市の子宮がん陽性反応適中度が２％にとどまり、岡山県で４．３％というのは、岡山市以外の率が非常に大きく、岡山市が非常に低いのではないかという感じがするのだが。

○事務局：県北の自治体は、ほとんどが集団検診で実施しているので、その差ではないかと思う。

○委員：可能なら婦人科の先生の意見を聞ければいいのだが。

○委員長：要精検率が若干高いために陽性反応適中度が落ちているというようなイメージに見えるが、いかに対応すべきかは非常に難しい問題だと思う。これについては、別途機会を設けて議論いただきたいと思う。

○委員：我々としてはフォールス・ネガティブが怖いわけで、それを抑えようと思うと精検へとなりがちである。その方が安全だと思う。

○委員長：それ自体が問題ではないかもしれない。

○委員：集団検診による要精検も我々の診療所でやっている。我々の所で出た要精検を他施設にお願いするということもしている。確かに同じ施設で検診から精密検査をするのは、よりスムーズに行きやすいのではないかとは思う。集団検診と医療機関での検診では、公的なところから要精検の結果が来たというのと、個人

の医院で要精検と言われたという程度の違いはあるのかなとは思うが。

３　議事

（１）がん教育について　　資料３事務局説明

○委員：授業での生徒さんの反応もとてもよく、やりがいがある事業だと感じているが、肝心の先生方が今一歩二の足を踏んでいるようだ。岡山県のモデル事業になったことで、これからどんどん拡大されていくのだろうが、先生方には忙しい毎日の中でもう一つ負担が増えるというふうな感想があるようだ。まず現場の先生方にしっかりがん教育の必要性を感じていただくことが大切だと思う。先生方の研修で、がん教育の説明や授業の仕方、体験談を話すというようなことが必要ではないかと思う。それと、岡山大学教育学部のような教員養成系の大学の学生を対象に、がん教育をさせていただくことが大切ではないかと思う。現場に入ったときに、がん教育をしようというハードルが低くなるのではないと思う。

○委員：学校現場は忙しいのでなかなかというのは現実的にはあると思う。がん教育というタイトルだけではなく、例えば生き方教育や人権教育に絡めてやってもらいたいと校長会や研修会でお願いすると、ちょっと範囲が広がるかなという感じがする。教員養成段階については、是非取り組んでいきたいこだと思う。子供たちのアンケートだが、前回は、よくわかった、普通、わからなかったという三択だったが、今回は普通を消しているので、わかりやすくなったと思う。普通というのがあったら、人間の心理として真ん中辺りに丸を付けるというのがあるので、わかりにくくなっていたと思う。がんという病気についてはよくわかったが、イメージは変わらないという結果が、前回の後楽館高校でも今回の清秀中学でも依然出ているので、先ほど事務局も言っていたプログラムの検討も必要かなと思う。アンケート最後の「授業を通じて、考えてみよう！」で、今までは記述式だったのをアンケートの項目で書いてもらっているので、生徒が答えやすかったと思う。身近な人ががんになったときに自分ができることで、普通に正しく接するというのがあるが、正しくというのはどういうことなのかなと。そのあたりが少し紐解かれると、後のイメージが変わったとか変わってないとかにもつながるのかなと感じた。今回の中学生にも教材としてリーフレットを使ったと思うが、正しいということを教え過ぎると、イメージが変わらないということもあるのかなと。人の命とかそういう方面で、科学的なことにプラスしていくと、もう少しイメージが変わったとかなという感じがした。

○委員：がん教育は岡山市のモデル事業でやっているのか。どういう計画で、誰がどのようなことをしているのか。

○事務局：今年度、岡山県が国のモデル事業で行っている。協議会をつくって授業プログラムを検討し、モデル的に中学校２校、高校２校で実施をしてみて、その反省から授業内容やプログラムを考えるということを中心にしている。何年か後には、がん教育が指導要領に入り、普通の授業として実施されるようなことも言われているので、学校で実施できる授業の内容として、どのような組み立てにしたらいいかというようなことも含めて検討されるのではないかと思っている。

○委員長：やはりイメージのところは、体験談のようなものが必要なのかなと感じた。学校教員の方からもう一回やってもらいたいという言葉がないということは、教員側に、がん教育を受けてもらったことで学生たちが何か変わったというアウトカムが見えてこないということもあるのかなと感じるが、この講義を行った後の学校側のフィードバックというか、成果の共有はどういう形なのか教えていただきたい。

○事務局：このアンケートは先生にも結果を返して、とてもいい反応が返ってきている。後楽館高校は、今年はＥＳＤのモデル校になっているので実施が難しいというように聞いている。清秀中学校はとてもよかったという意見をいただいており、多分継続して来年もという話があるのではないかと思う。

（２）ピンクリボン啓発活動について　　事務局説明

○委員：クレドでのイベントは若年の人が大勢来るとなると、若年の人にどういうことを訴える予定なのか。

○事務局：２０代の方とかが多いと思うので、ピンクリボンはどういうものなのか、乳がんに関する活動に賛同するものということを知っていただくということと、母親に４０、５０代が多いと思うので、家族の方にも検診を勧めていただくことをお願いしたいと思っている。

○委員：ご存じの方も多いと思うが、若年者に映画のキャンペーンなどとセットで検診を勧めるのをテレビ局が行ったことに対して、乳がん学会がデメリットの方が大きいということを申し入れたことがある。検診は皆が受ければ受けるほどいいとか、若い内から受ければ受けるほどいいという単純なものではないというのは皆さんよくご存じだと思う。その辺は少し学会の動向とか見て慎重にした方がいいのではないか。母親が受けるというのは非常にいいことだと思うが、若い人はどんどん受けましょうとならないように考えた方がいいと思う。

○委員長：がん教育のアンケートでも家族にたばこをやめてもらうというのが出てきたように、確かに有効な話だと思うが、委員が言われるように方向を間違えると若い人に受けてくださいということになりかねないので、そのあたりが明確にわかるようにアイデアを出していただければと思う。

○委員：岡山市と協議してきたが、企業の社会的責任という面で、本当はもっと基金というかお金を出して啓発するべきなのだが、それがまだ完璧なものにならなかったため、岡山市が苦労してこれだけのことをするということなので、私どもとしては職員を何十人か出して、啓蒙活動をしていきたいと思う。

○委員長：テントの中の内容についてはなかなか思いつかないと思うが、何かいいアイデアがあったら事務局に連絡いただけたらと思う。

（３）肺がん対策について　　資料４事務局説明

○委員：南保健センター管内の受診者数増は、地域の運動が良かったのではないかという話があったがどのような実例があるのか。

○事務局：各保健センターごとに愛育委員の方に地域の特性を生かしながら取り組んでいただいているところだが、南保健センターでの特徴的な取り組みとしては、アンケート調査の検診を受けない理由に怖いとか健康に自信があるとか子育て中で時間がないとかいろいろあるのだが、タイプ別にどういうふうに働きかけたらいいかということをしっかりと愛育委員さんが主体的になって話し合いを行い、その結果をもとに受診率向上に取り組んでいったというような経過がある。検診結果が怖いからということで受けない方が結構いるが、例えば吉田学区では地域で生きるためにもっと知ってもらいたいということで、がん医療と緩和ケアについての講演会を実施し、地域の方に多く来ていただいていることがある。こうした取り組みを愛育委員さんが主体的になって継続的に行っていることがこうした結果につながっているのではないかと考えている。

○委員：これは実数で出しているが、単純に北は人が減って南は増えているという影響が消せていないのではないか。北保健センターは人口が減って南保健センターは人口が増えて、母数が増えれば受診者も増えるような気がするのだが。

○事務局：がん検診受診率の分母は、企業検診等を受けている人は対象から外す必要などがあるので、なかなか正確にはわからないのだが、一番コアになる５０代から６０代の人口については、この６エリアそれぞれでこの５年間そう大幅な変化はなかった。現在の北区北保健センター管内も高齢化が進んだ地域ではあるが、まだ人口減に転じているほどの過疎地域ではないので、人口増減でこのわずか５年間の間の変化を説明できないのではないかと考えている。

○委員：ＳＭＲが大体１００前後で推移しているというのは日本中共通なので、累積で増えているというのは人口構成の高齢化が影響しているのは間違いないと思うので、補正をかけたら全国でこれぐらいになると思う。それからいうと北区北はどちらかというと高齢化率が頭打ちになって、７５歳以上の人がぐんぐん増えている地区ではなく、都市部の７５歳以上の人が増えてきていることとかが影響しているのではないかと思ったのだが、５年間で大した変化がないと言われたらそうかもしれない。

○委員長：なかなか解析が難しいと思うが、南の方で特徴的な取り組みをされているということであれば、そういった取り組みを是非その他の地域にも伝えていただけるといいと思う。

○委員：保健センターごとの地域性も出ているのかなという気がする。高齢化が進んでいるし、いろいろな事情で行こうと思っても行けなかったり、足元が悪かったからとかいろいろな理由があるかと思う。南の方では受けない人へのアンケート調査を行うことでいい結果が出ているということも聞いたので、愛育委員としては、アンケートで効果が出るならば、市全体に向けての取り組みとして検討していきたいなと思う。

○委員：検診で発見した肺がんのステージ分類と、自覚症状が発生して医療機関で発見したステージ分類と予後を比較したデータはないのか。

○委員長：正確な数は出せないが、明らかに検診で発見した方が手術可能な症例が多くて予後も良いというデータはある。

○委員：それを全面的に出して検診を受けるように啓蒙する方が理にかなっているのではないかと思う。

○委員長：肺がんは年齢と共に増えていく病気ではあるが、戦後たばこがあまり吸えなかった頃より、たばこが自由に吸えるようになった時代の方が、６０、７０、８０歳の辺りで増えてきているので、肺がん罹患、死亡数はこの辺りの年齢は増えていっているのだろうと思う。死亡数は５５から５９歳、６０から６４歳という辺りが平成２４年度は減っているが、２１、２２、２３年度と増えてきている。ようやく仕事を終えた年代の辺りから肺がんで死亡する方が増えているという現況から、この検診を受けるように啓発するターゲットは確かにこの年代になると思う。この年代の方は大体６０歳位までは主に職場健診を受けているが、退職後は検診を受けられていないようだ。もう少し年を経て７０歳位になると、今度は受けない方が減って住民健診を受けるようになっている。仕事を離れる前後でまだ社会的にもアクティブな方が結構検診を受けていないという状況があるようなので、ターゲットをこういったところに絞るとするとどのようなアプローチが有効なのかということも検討する価値があると思う。

○委員：検診のメリットを前面に出すということが大切だと思う。いろいろな検診を受けましょうという市からのお知らせが年に一度各家庭に届くが、目に触れないと検診の必要性とかが日常の中で置き去りにされると思う。国立がんセンターでは、大腸がん検診について啓発するトイレットペーパーを各市役所や企業とで使ってくださいといっている。トイレは有効だと思う。検診についてのメリットとかを書いたものを、いろいろな方が活動している公民館とかのトイレに置いていただくようにして、検診を受けないといけないと感じてもらえるようになればいいと思う。

○委員：退職時に健康保険証の切り替えがあると思うが、申請窓口で検診の効果を盛り込んだパンフレットをお渡しすることを行ってもらえれば少し効果があるかなと思う。

○委員長：健康保険の切り替え時でのアクセスと、企業の方で職員の退職時に今後の健康管理についてアドバイスとか何かされている事例があれば教えていただきたい。

○委員：健康保険の切り替えは、企業は庶務の方でするのでそのときに何かパンフレットがあれば渡すというような協力はできるかもしれない。

○委員長：企業で退職時に産業医の方からというのはとても大変なので、パンフレットを渡すのは現実的だと思う。

○委員：臨床の現場でよくあることなのだが、身近な人が大腸がんになったから大腸がんの検診を受けるというパターンが多い。医療機関の先生がそういうようなアプローチをかけるとスムーズに検診率が上がっていくのではないかと思う。

○委員：受けない理由の１番目と３番目に、受ける時間がないとか費用がかかるというのがある。もう少しお得感というか、受けたほうが経済的負担も軽くなるという啓蒙も必要なのかと思う。がんになってしまうとお金がかかるので。

○委員長：早期発見がいかに経済的に楽かということも含めたパンフレットができるといいと思う。どこのものだったか思い出せないが、検診で見つかった場合の医療費、出症状発見になった場合の医療費、そういったデータをパンフレットにしたものもあるので有効に使っていきたいと思う。検診の啓発については、退職前後の方にいかにアプローチするかということなどで様々な意見をいただいた。次に喫煙対策について協議いただきたい。４０代女性の喫煙が増えてきているというショッキングなデータがある。団塊の世代の方が年を取ってきたために喫煙率が若干揺れ戻しているように見えるが、５０代の方も上がってきている。今まで禁煙に関しては、例えば岡山駅の喫煙所の問題とかについて意見をいただいて、事務局の方でも取り組んでもらっているようだが、何かこの禁煙に関して意見はあるか。

○委員：学校は普通校内禁煙になっているが、残念なことに守られていない。例えば地域とか学区のスポーツ大会などで運動場を使用するときに、バックネット裏なら喫煙コーナーを設けて喫煙してもいいと黙認されているようだ。子供が集まっている場で大人がバックネット裏でぷかぷか吸っているという姿は大会のときによく見られている。最近、私の住んでいる地区であった盆踊り大会では、公会堂で若い母親がぷかぷか吸って、その周りを子供が駆け回っていた。町内会長さんや愛育委員さんもいらっしゃるので、穏便に喫煙場所を移動してもらうようにお願いをしたのだが。学校にしろ地域にしろ、注意をするということで関係が壊れるということや嗜好品だからといったようなこともあり、非常に注意しづらい状況にある。本当に本人の意識を変えないことには、いくら周りが禁煙、禁煙といってもまだまだ受動喫煙してしまうような状況で、本当に禁煙に対しての認識が甘い、緩いというのが現状のようだ。何とか意識のレベルをもっと高めていただけたらなと思う。

○委員長：先ほどのがん教育ではないが、喫煙に対して全くネガティブな意識を持たれてない方がたくさんいるので、そこを変えていくことは大切だと思う。

○委員：がん教育を受けた後の子供たちのアンケートでは、今後自分たちはたばこを吸わないというのがすごく多い。でもたばこを避ける、受動喫煙をしないというのは、２年生、３年生はゼロ。自分は受動喫煙したくないと意思表示できるように子供の頃から意識を植えつけるのが大切ではないか。学校に選挙で来られる人がたばこを吸いたいというようなことも何年か前にあったと思うが、地域との関係で本当に難しいのだが、受動喫煙しないという意識がもっと広がれば、少し好転するではないかと思う。岡山市や岡山県の関連の半分公共施設のような所でも、宴会のときにはたばこは可。そういうところから少してこ入れをするとか、市役所の職員の宴会のときにはせめて１次会では吸わないとか、ちょっと苦しいが何かそういう意思表示をするのも考えられる。学校は敷地内禁煙になっているので、教職員は吸わないと思うが、地域との関わりとなると言いにくいところは確かにあると思う。この子供たちのアンケートの結果からすると、積極的に吸わない子は増えるかもしれないが、受動喫煙は仕方がないと思う子がいるかもしれない。

○委員：岡山市とは関係なく、私が勤めている職場でがん教育をさせていただいている。そのときのアンケート結果では、喫煙をしている親にたばこを吸わないよう頼んだり、今回習ったから受動喫煙したくないと頼んだが、子供の立場というのは非常に弱いもので、だめだったという子供が何人もいた。そういう結果もあるということを知っておいてもらいたい。

○委員長：受動喫煙は、２年、３年生と社会性が出てくると認めていってしまう傾向があるのか。社会全体を変えないといけないこともあるが、この場は岡山市のがん対策なので、できるところから禁煙対策を進めていっていただきたいと思う。企業内での禁煙というのはなかなか大変だと思うが、肺がんは喫煙の影響が大きいことは間違いないことなので、経営的にも職員の医療費を減らすために禁煙はとても有効な手段であると思う。是非いろいろな所で動いていっていただけるといいと思う。岡山市でつくったがん教育のパンフレットにも禁煙の話があったと思うが、あのパンフレットをつくってみて、何か反響というか効果というか見えているものがあったら教えていただきたい。

○事務局：パンフレットはまだがん教育でしか使っていない。愛育委員さんにも使っていただくよう配布しているが、パンフレットの反響というのは、まだ入ってきていない。

○委員長：禁煙問題は、呼吸器、肺がん、循環器などいろいろな学会も取り組んでおられるので、是非手をつないでいきたいと思っている。

○委員：民間でも分煙が進んでありがたいと思っている。ただ、分煙しても入り口に喫煙場所を設けているお店がまだたくさんある。どうしてもそこで一服、出てから一服というような感じになると思うので、設置場所を考慮するとか、もう少し分煙についての積極的な進め方をお願いしたいと思っている。

○委員長：禁煙についても、岡山市からこの輪が広がっていくととてもいい結果が期待できると思う。

4　連絡

次回委員会の開催について：平成２７年２月～３月に開催予定

5　閉会